

淀川城北ワンドにおける外来魚駆除状況(2024年の報告)

- 渡邊 翔吾・市川 昂宗・北川 瑞希・三橋 雅子(大阪工業大学 城北水辺クラブ)
・田中 耕司(一財)河川情報センター)・鶴田 哲也(大阪産業大学)
・山本 義彦・丸山 勇氣(大阪府立環境農林水産総合研究所)
・河合 典彦・綾 史郎(淀川水系イタセンパラ研究会)・高田 昌彦(琵琶湖を戻す会)

「淀川水系イタセンパラ保全市民ネットワーク」は2012年より淀川下流に存在する城北ワンド群の34, 35号ワンドで定期的に地引網を引き、外来魚の駆除活動を行っている。2024年も例年と同様に4月から11月の間に原則、月に2日、1日につき4~6回地引網を引いて駆除活動を行った。地引網を引いた総回数は66回であった。昨年の2023年は34, 35号ワンドの北に新規に作られたワンドにおいても地引網を引いていたが、足場が悪く、苦勞する割に捕獲数は多くなかったため、本年は北側の新規ワンドでの地引網は6月と10月の2日のみ実施した。

2021年~2023年の間は在来魚を含む総個体数中の外来魚数の割合(外来魚率)は3割ほどに抑えられていたが、2024年は4割を超え、増加していた。外来魚中ではブルーギルが最多で外来魚個体数の7割を占め、次いでオオクチバス、タイリクバラタナゴが約15%を占めた。ここ数年減少傾向にみられたタイリクバラタナゴの個体数がやや増加し、オオクチバスはやや減少した。

2024年に採れた外来魚の総数は昨年の外来魚の総数と大きくは変わっていなかったため、在来魚(特にモツゴなど)の個体数が少なかったことが外来魚率を上げる要因となった。モツゴなどの在来魚の個体数の変動は2012年からのデータにおいてもみられるため、特別に外来魚率が増加している状況とは思われなかった。しかし、捕獲・駆除を実施していても、依然として体長3cmほどの小型のブルーギルが多く捕獲されるため、今後も継続して外来魚駆除活動を実施していきたい。